

# 言語能力と異文化コミュニケーション能力(ICC)自己評価の関係 -留学生と日本人大学生の比較を通じて-

## The Relationship Between Self-Assessment of Language Proficiency and Intercultural Communication Competence (ICC) -A Comparison Between International Students and Japanese University Students-

何 広秀<sup>\*1</sup>, 江島 徹郎<sup>\*2</sup>, 野崎 浩成<sup>\*2</sup>, 山坂 菜々<sup>\*3</sup>

He Guangxiu<sup>\*1</sup>, Ejima Tetsuro<sup>\*1</sup>, Nozaki Hironari<sup>\*2</sup>, Yamasaka Nana<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup>愛知教育大学院教育学研究科, <sup>\*2</sup>愛知教育大学, <sup>\*3</sup>愛知学泉大学

<sup>\*1</sup>Graduate School of Education Aichi University of Education, <sup>\*2</sup>Aichi University of Education

<sup>\*3</sup>Aichi Gakusen University

Email: s224m021@aeu.ac.jp

あらまし：本研究は留学生と日本人学生を対象に言語能力と ICC の関係を検討した。2回の調査の結果、留学生は自己評価と ICC に正の相関があったが試験成績とは相関しなかった。日本人学生は自己評価・成績共に ICC と有意な相関はなかった。以上から、ICC は言語能力よりも日常の対話への自信と結びつきやすいことを示した。

キーワード：異文化コミュニケーション能力, 言語能力, 留学生, 日本人大学生

### 1. 背景

グローバル化が進展する現代社会において、異文化コミュニケーション能力(Intercultural Communicative Competence, 以下 ICC)の育成は高等教育の最重要課題の一つである。従来の理論的枠組みでは、言語能力は ICC の基盤的要素として位置づけられてきた(Byram, 1997; Deardorff, 2006)。しかし、日本では言語の習熟度と実際のコミュニケーションの成否が必ずしも一致しないことが指摘されている(西原, 2009)。筆者は、高い日本語能力を有しながらも、日本における非言語的な場面に苦慮する留学生が少なくないを考える。こうした現状は、学生の言語能力と ICC に乖離が存在することを示唆しており、本研究の重要な出発点となっている。

### 2. 目的

本研究の目的は、日本に在住している留学生(以下 Int)と日本人大学生(以下 Jpn)を対象に、言語能力と ICC の間の相関性を明らかにする。

### 3. 方法

本研究は、Web によるアンケート調査を用い、Arasaratnam(2009)の ASKS を参考に ICC を測定する。あわせて、CEFR(2001)の自己評価記述を参考に、言語能力を四つの技能(聞く・話す・読む・書く)に分け、(以下言語 4 技能)質問項目として質問紙に添付した。アンケート調査で収集したデータは IBM SPSS Statistics 27 で独立サンプル t 検定を行い、各変数の相関係数を算出する。

### 4. 調査

アンケート調査を 2 回を、T1 と T2 と略称する。T1 は 2025 年 6 月 12 日に実施した。調査対象

は、愛知教育大学において①Int と Jpn がともに履修する授業(「オーラルコミュニケーション I」「World Education I」)の大学生と、②学内の国際交流活動に参加する大学生である。

質問紙では、ICC および言語 4 技能の自己評価(5 段階尺度)を測定した上で独立サンプル t 検定をした上で上述の二つの変数の相関係数を算出した。

T2 は T1 と同様な条件で 2025 年 7 月 17 日に実施した。筆者はより調査対象の言語能力を把握できるため、Int と Jpn の語学試験(TOEIC, JLPT 等)の成績の自己申告を求めた。得られた成績は文部科学省(2018)と国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会(2025)に基づき A1~C2 のレベルによる 1~6 点に換算した。T1 と同じ手法でデータを処理した。

### 5. 結果

第一回の調査(以下 T1)で収集した有効回答数は 40 件であった(Int13 名, Jpn27 名)。

結果を表 1, 表 2 に示す。t 検定の結果、ICC の平均値は Int が Jpn よりも 5%水準で有意に高いことが示された ( $t(38)=2.40, p<.05$ )。言語 4 技能の自己評価の平均値は Int の方が Jpn よりも 1%水準で有意に高いことが示された ( $t(38)=3.38, p<.01$ )。

表 1 T1 での t 検定の結果

項目	Nationality	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準誤差
ICC	Jpn	27	56.37	13.443	2.587
	Int	13	65.92	6.982	1.936
言語 4 技能	Jpn	27	11.07	2.165	.417
	Int	13	13.69	2.562	.711

第二回の調査(以下 T2)で収集した有効回答数は 39 件であった(Int21 名, Jpn18 名)。

表 2 T1 での各変数の相関係数

Nationality	変数		ICC	言語 4 技能
Jpn	ICC	相関係数	1	.209
		有意確率 (両側)		.295
		度数 (N)	27	27
	言語 4 技能	相関係数	.209	1
		有意確率 (両側)	.295	
		度数 (N)	27	27
Int	ICC	相関係数	1	.702
		有意確率 (両側)		.007
		度数 (N)	13	13
	言語 4 技能	相関係数	.702	1
		有意確率 (両側)	.007	
		度数 (N)	13	13

分析の結果を表 3, 表 4 に示す. また, t 検定の結果, 語学試験の成績の平均値は, Jpn よりも Int の方が 1% 水準で有意に高かった ( $t(22.75)=12.72, p < .01$ ). ICC 総得点と言語 4 技能の自己評価は, Jpn と Int の間で, 有意差が確認できなかった.

表 3 T2 での t 検定の結果

項目	Nationality	度数 (N)	平均値 (M)	標準偏差 (SD)	平均値の標準誤差
ICC	Jpn	18	61.44	9.154	2.158
	Int	21	54.57	12.588	2.747
言語 4 技能	Jpn	18	13.33	1.970	.464
	Int	21	12.25	1.895	.413
成績	Jpn	18	1.89	.900	.212
	Int	21	4.81	.402	.088

表 4 T2 での各変数の相関係数

Nationality	変数		ICC	言語 4 技能	成績
Jpn	ICC	相関係数	1	.347	.149
		有意確率 (両側)		.159	.555
		度数 (N)	1.970	18	18
	言語 4 技能	相関係数	1.895	1	-.177
		有意確率 (両側)	.159		.483
		度数 (N)	.18	18	18
	成績	相関係数	.149	-.177	1
		有意確率 (両側)	.555	.483	
		度数 (N)	18	18	18
Int	ICC	相関係数	1	.229	-.145
		有意確率 (両側)		.318	.530
		度数 (N)	21	21	21
	言語 4 技能	相関係数	.347	1	-.128
		有意確率 (両側)	.318		.580
		度数 (N)	21	21	21
	成績	相関係数	-.145	.128	1
		有意確率 (両側)	.530	.580	
		度数 (N)	21	21	21

## 6. 考察

本研究の相関分析の結果, ICC は語学試験の成績とは正の相関がみられず, 言語能力 4 技能の自己評価との相関も属性や調査時点によって変動する性質を持つことが明らかになった. T1 において, 有意

な正の相関は Int の言語 4 技能の自己評価と ICC にあった(表 2). 一方, Jpn に, 有意な相関はなかった(表 2). この結果は, 調査開始の時点において, Int の ICC が, 言語能力の自己評価と強く結びついていたことを示している. T2 において, Int の両指標の相関は弱まり(表 4), 有意な相関はなかった. また, Jpn も, T2 において ICC と言語 4 技能の自己評価との相関はなかった. さらに, 語学試験の成績は, いずれの集団においても ICC と有意な相関はなかった.

T1 における t 検定において, 有意な差は Int と Jpn の ICC, 言語 4 技能の自己評価にあった. 一方, T2 において有意差は, 語学試験にあり, ICC および言語 4 技能の自己評価にはなかった. 約 1 か月の授業・交流を経て, 両集団の自己評価の指標が接近したことを示唆している.

Jpn については, T2 において語学試験の成績に大きな変化が見られなかったにもかかわらず, 言語 4 技能の自己評価および ICC の平均値が上昇した. これは, 英語を使用する授業への継続的な参加を通じて, 「自分なりに対応できている」という認識が強まった可能性を示す結果である.

これに対し, Int では, T2 において語学試験の成績が高水準で安定していたが, ICC および言語 4 技能の自己評価は相対的に伸び悩んだ. これは, 日本での生活や大学での実際のやり取りを通じて, 試験では測定しにくい困難に直面し, 自己評価がより慎重になった可能性を反映していると考えられる.

以上より, t 検定の結果は, 語学試験成績のような客観的指標は短期間では変化しにくく, ICC や言語自己評価といった自己認識に関わる指標は, 学習や経験の文脈で変動しやすいことを示している.

## 7. 結論

本研究の結果から, ICC 自己評価は, 語学試験の成績よりも, 言語能力の自己評価と結びつきやすいことが示唆された. ただし, この関係は研究対象や調査時点で一貫して確認できておらず, 学習者の立場や経験の状況によって変動する可能性がある.

## 8. 課題

本研究は小規模な調査であるため, 結果を一般化するには限界がある. 今後はサンプルサイズを拡大し, 研究対象の出身国や滞在期間による ICC の変容および差異を詳細に検証する必要がある.

## 参考文献

- (1) Byram, M. (1997). Teaching and assessing intercultural communicative competence. Clevedon, UK: Multilingual Matters
- (2) Deardorff, D.K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence as a student outcome of internationalization. Journal of Studies in International
- (3) Association of American Colleges and Universities. (2009). Intercultural knowledge and competence value rubric.